食卓の登場人物たち――『セザール・ビロトー』の新居祝いの場面の生成

鎌　田　隆　行

アンカ・ミュルシュタインの2010年の著作『バルザックと19世紀パリの食卓』は、『人間喜劇』の作者における「食」の問題――意外にもこの主題についてはまとまった論考が少なかった――を取り上げ、バルザック自身の食生活を描くとともに、作中における食の問題を広く論じた書である[1]。『人間喜劇』の作者が、肖像画などに見られるそのエネルギッシュな体躯にふさわしく牡蠣などの好物を貪るように食した一方、執筆時には食事の節制を行って作品制作に特化した生活を送っていたことも改めて喚起された[2]。そしてとりわけ、作品における食のシーンの多様な現われを明らかにしたことで貴重な貢献となっている。伝記作者による同書は、より専門的なバルザック研究におけるこの問題の深化の可能性を示唆してくれたといえる[3]。

実際、バルザックは小説内における登場人物たちの「食」の表象を写実的な文学の一つの争点として早くから問題化していた。文学修行中であった1820年の習作『ファルチュルヌ』には、「『ルネ』で果たして人は食事をしているであろうか？」と記している[4]。『ファルチュルヌ』は、同年これに先立って試みられた未完の『アガティーズ』の草稿の断片を再利用しながら執筆され、これもまた完成を見なかった歴史小説で、書簡体小説の『ステニー』とともにこの作家の最初期の小説作品である[5]。二つの歴史小説の試作において、話者は同時代の小説家たちが「主人公の食欲のことをほとんど気に留めていない」ことを批判している[6]。すなわち、バルザックは習作の再編の過程で『アガティーズ』のこの文言をほぼそのまま『ファルチュルヌ』に用い、さらにロマン主義の一大レフェランスであるシャトーブリアンを引き合いに出すことで、文学の刷新を目指そうとする野心を表明したのである。後に『人

1　Anka Muhlstein, *Garçon, un cent d'huîtres !*, O. Jacob, 2010［アンカ・ミュルシュタイン『バルザックと19世紀パリの食卓』塩谷祐人訳，白水社，2013］．同書の邦訳を論じた拙評も参照されたい（『週刊読書人』，2013年４月12日号，p. 5）。

2　バルザックが執筆時に自らに課した食事制限については、シュザンヌ・ジャン・ベラールによって早くから指摘が行われていた (Suzanne Jean Bérard, *La genèse d'un roman de Balzac. Illusions perdues. 1837*, Armand Colin, 1961, t.I, pp.9−10).

3　2014年５月24日に日本バルザック研究会によるシンポジウム「バルザックと食」が開催された。本稿はその際に行った研究発表「バルザックと食――生成批評の観点から」をもとにし、加筆修正したものである。

4　Balzac, *Œuvres diverses*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t.I, 1990, p.703.

5　『アガティーズ』と『ファルチュルヌ』の成立過程については次の論考を参照のこと。René Guise, « Le problème de *Falthurne* », *L'Année balzacienne* 1972, pp. 3−42 ; 道宗照夫『バルザック初期小説研究「序説」』，風間書房，1982，pp. 9 −80.

6　*Op.cit*., p.654, 703.

間喜劇』の作者が実現したリアリスティックな社会表象が近代小説の発展に決定的な寄与を果たしたため、衣食住など人間の根本的な営みを文学作品が描き出すことは現在ではあまりにも当然のことのように思われるが、散文によるフィクションがまだ曖昧なステイタスしか有していなかった時代にあって、平俗な事実の描写によって社会の機能ぶりを表すことは新しい表現方法の敢然たる模索であった。そしてまた、19世紀とは、食文化が社会の大きな変動を鋭敏に反映していた時代である。たとえば、需要側ではパリの人口増（特に地方からの上京者）、供給側では王侯貴族のかつての料理人の市井での開業などといった要因からこの首都での外食産業が急速に発展した。食はかように社会の動向を捉える格好の観測ポイントとなっていた。実際、19世紀文学における食事の場面の多くは、特定の食事場所や食事風景を映し出すとともに、人間関係、生活様式の諸相を表象し、また、登場人物たちを集結させることによって重要な説話論的機能を担っている[7]。

したがって、我々にとって重要なのは、描き出されるバルザック時代の食そのものよりも、作品の中で食の問題がどのように機能しているかを問うことである。社会の総合的な表象を目指したこの作家における食文化の現れは実際、多様性に富む。作中で食が長々とした言及の対象になることこそ少ないものの[8]、物語や一挿話の中で束の間姿を現したり、あるいはその背景として言及されたりする場合は数え切れず、またその射程も一様ではない。たとえば『谷間の百合』においては、主人公フェリックスは幼い頃にトゥール地方の市民の名物料理であるリエットを周りの子供たちのように食べさせてもらえなかった悲しい記憶を持つ[9]。あたかもその代償であるかのように、彼は長じてモルソフ夫人アンリエットを愛するのである[10]。他方、『ニュシンゲン銀行』では、話者があるレストランの個室で耳にしたとされる、隣の部屋の四人の酔客たちの錯綜した会話で全編が進行する大胆な語りの技法が用いられている。また、『パリにおける田舎の偉人』では、カルチエ・ラタンの安食堂フリコトーが仔細に描かれる。同作品の初版では主人公の手紙に続く冒頭の場面に登場し、パリ物語の開幕にふさわしい「スペクタクル」の場として位置づけられている[11]。物語上はその「続編」に相当するが制作上は先に執筆・刊行された『しびれえい』（後の『娼婦盛衰記』序盤）の冒

---

7 Cf. Philippe Hamon et Alexandrine Viboud (éd.), *Dictionnaire thématique du roman de mœurs en France. 1814-1914*, Presses Sorbonne Nouvelle, 2008, t.2, p.271.

8 バルザックにおいて、食卓に供された食品や飲料が延々と描き出されるケースは少ない。前述（註７）の文学事典の「食事」の項目においてスタンダール、フローベール、ゾラ、モーパッサンらの作品が特権化されても『人間喜劇』の作者が挙げられていないのはおそらくこうした理由によるものであろう (*Ibid*., pp.271−278).

9 Balzac, *La Comédie humaine*, nouvelle édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976−1981, 12 vol. (以下 *Pl.* と略), t.IX, p.973. ミュルシュタインもこれを挙げている (*op.cit*., pp.18−19).

10 この語呂合わせは『フランス・キュルチュール』でのエリック・ボルダスの指摘による。
http://www.franceculture.fr/emission-les-nouveaux-chemins-de-la-connaissance-balzac-et-son-monde-34-le-lys-dans-la-vallee-2011-1

11 フリコトーはユゴーやミュッセなど同時代の作家もその名を挙げている有名店であった。『偉人』の話者は、「これほど素晴らしいスペクタクルを見せてくれるパリのレストランは少ない」としている (*Un grand homme de province à Paris,* Souverain, 1839, t.I, p.35 ; *Pl*., t.V, p.296).

頭はオペラ座の仮装舞踏会の場面であった。パリの文壇での挫折を運命づけられたリュシアンの冒険と、再び首都に返り咲くその姿を描くテクストの冒頭部が好対照なスペクタクル空間から開始される同位性を持っていたことになる[12]。

以上の数例から既にうかがえるように、『人間喜劇』において多岐にわたる食の場面は、作品の意味作用を複雑化することに寄与している。これを十全に整理することはもちろん本論の埒外である。ここでは『セザール・ビロトー』の特定の食の場面に限定し、生成論の観点から、テクストの成立過程で食の問題が作品の語り、筋立て、文体、登場人物網の形成といかなる関係を切り結び、作品の構築に貢献しているかを考察する[13]。同作品における食事の描写としておそらく最も知られているのはビロトーの主催する舞踏会の際のシュヴェによる仕出しであるが[14]、本論で分析の対象とするのはポピノの新居祝いの場面である。第6章「二つの星」の一部をなし、「セファリック油」の広告文を含むこのシーンは、作中の筋立てにおいて重要な伏線をもたらすと同時に、複数の再登場人物を糾合し、『人間喜劇』中の重要な結節点となっている。フランス学士院図書館ロヴァンジュール文庫に保存されている原資料を検証すると、草稿の入稿以後7回の校正の対象となっていることが確認できる。このうち、食の表象に決定的な変容が生じたのは草稿から最初の校正の局面であり、以下ではこれを中心に生成過程を跡付ける。

1．草稿段階

草稿の当該場面では、ビロトーの了解のもとに新たに店を構えることになった店員ポピノの新居に、新製品の販売協力を依頼された出張販売人ゴーディサールが訪れ、後からその友人の作家が広告文を携えて駆けつけ、文案が披露される。三人は成功を期し、門出を祝う。この大筋は最終版まで変わらない。だが、細部には数多くの重要な変更がもたらされていく。

この場面が書かれる以前に、小説内でこれに先立つ箇所は既に印刷所に入稿され、校正作業が進んでいた。ビロトー自身が店の主力の二製品について書いたとされる広告文は、草稿段階ではその存在がほのめかされるだけであったが、再校で実際に広告の文言が挿入された。この校正紙の修正はバルザックが草稿をフォリオ37まで書き進めつつ行ったものであることが判明している[15]。問題の第二の広告文はその後の草稿で登場する。すなわち、修正の途上

[12] 『偉人』の草稿において、作者は当初は冒頭の章を「フリコトー」と題する計画であったが、これを変更し、「手紙」としている。この問題については拙著で論じた（*La Stratégie de la composition chez Balzac. Essai d'étude génétique d'*Un grand homme de province à Paris, Surugadai-shuppansha, 2006, p.42).

[13] 『セザール・ビロトー』のアイデアの誕生は1833年秋に遡る。当初は哲学的作品として構想され、バルザックの意を汲んでフェリックス・ダヴァンによって書かれた1834年12月の「『哲学研究』序文」では「実直な商人、周囲の敬意を必要とする商人の完璧な典型である『セザール・ビロトー』は、「実直」という思考によってピストルで撃たれたかのように突如として死を迎える」となっている。執筆が本格的に軌道に乗るのは1837年の夏である。『フィガロ』紙との新聞連載の契約を経て、作品は『パリ生活情景』の作品として発展する。バルザックは『フィガロ』の財政的破綻から連載発表計画を断念し、作品は裏取引の後に1837年12月に出版者ブレによって刊行されることになる（版本に付された年号は1838年）。Cf. *Pl.*, t.VI, « Histoire du texte », pp.1119−1132.

[14] *Pl.*, t.VI, p.166 et suiv.

[15] *Pl.*, t.VI, p.1127.

で「第二次の架空テクスト」が挿入され、さらに物語の少し先に位置する第６章に波及的な援用をもたらしたことになる[16]。では場面の構成を見ていこう。まず、広告文の挿話の布石として、ポピノの伯父に恩義があることから販売協力を快諾したゴーディサールが宣伝文の準備を確約するくだりが書かれている。

> ゴーディサールは十分間でポピノの秘密を知り、その重要性を察知して二つの約束をした。まず、ポピノのオイルの広告文を準備すること、そして、ポピノのオイルが他の化粧品全てを凌駕してライヴァルの息の根がより確実に止められるように、パリの香水商の販売委託を軒並み取り付けてくること[17]。

そして、問題のポピノ宅での食事の場面は次のように描かれていた。

> 一日の仕事に疲れた二人の友〔ポピノとゴーディサール〕は夜９時、薪の束が燃え盛る暖炉の前に座り、ラ・ポトリ通りの市場の飲食店から買ってきたボーヌ・ワインのボトルをあけながら、ゴーディサールが温め直した簡素な夕食をとり終えようとしていた。
> 「サプライズを準備しましたよ」と名うての出張販売人はポピノに言った。「これから、物書きがやってくるんです。『忠実な羊飼い』の標語を作った奴で、気立てが良く、頭の回転も速い。教養があり、ゲテ座でヴォードヴィルが上演されたこともある。そいつが持ってきます。」
> 「何をです？」とポピノ。
> 「広告文です。以前に計画した広告文。そこで彼の心遣いをねぎらってやろうと思って、ポンスのボールと栗やお菓子を奮発したというわけです。」
> 実際、ノッカーの何度か鳴る音に続いてあれこれと飲食物が到来し、その少し後でオペラの台本作家のような格好をした白髪まじりで三十がらみの売れない作家がやってきた。
> 「入りたまえ、ダランクール。ポピノさんを紹介しよう。前に話した若者で、成功すればお礼がもらえるぞ。」
> ダランクールはゴーディサールが差し出すポンス酒のグラスを見て相好を崩しつつ、「お役に立とうと全力で頑張りました」と言った[18]。

上記で確認したように、これに先立つ箇所では広告文の準備について言及されているものの、それを文人に委ねるといった話は皆無である。それゆえ、「書き手」はサプライズ・ゲストとされている。ことによると作者自身、最初のポピノとゴーディサールのやり取りを執筆し

---

[16] バルザックにおける第二次の架空テクストの手法については次の拙論で論じた。« Textes dans le texte : jeu et réalisme dans les œuvres de Balzac » in Claude Carozzi et Shoichi Sato (dir.), *Histoire. Fiction. Représentation*, Université de Nagoya, 2007, pp.121−130.

[17] Lov. A92, f°77r°.

[18] A92, f^{os} 86r°-87r°.

た時点では広告文の「書き手」を明確に構想していなかった可能性もある[19]。この段階では「書き手」はフィノではなく、『人間喜劇』では他に登場例がないヴォードヴィル作家のダランクールなる人物である[20]。

飲食に関して、ポピノとゴーディサールはここで「簡素な夕食」に甘んじているが、それでもゴーディサールはダランクールを迎えるためにポンス酒とアミューズ類を準備している。このラム・ベースのアルコールは『人間喜劇』に頻繁に姿を現し、「ポンス酒」の語は20作品（未完の２作品を含む）に計38回登場している[21]。中でも特に重要な意味作用を担っているのは『あら皮』（1831）の宴会の場面である。謎の護符を手に入れたばかりの主人公ラファエルが小手試しに願った通りに招かれたこの饗宴では、集まったジャーナリストら一同がしたたかに酔いつぶれ、才気走った弁舌から罵詈雑言まで、とめどなく言葉を応酬させる。フランベされたポンスの青く輝く幻想的な炎のはかなさが、あてどない情念と満たされない矜持に苦しみ、自虐に堕す若き文士たちの境遇を象徴している[22]。ここでは初版に基づいて引用する。

> この時、奇妙な叫び声が四方八方から聞こえていた。サロンを見渡せば、ミルトンの「伏魔殿」を先取りしたかのような光景であった。野生的なエネルギーに活気付けられた狂気の踊りが見られた。ポンスの青い炎が人々の顔を不吉な色に染めていた。笑い声が花火の爆音のように轟いていた[23]。

この場面に想を得て若者たちの奇矯な饗宴を描いたテオフィル・ゴーチエの「ポンスのボール」（1833年、『若きフランス』所収[24]）に顕著であるように、以後、物書き、とりわけジャーナリストのオルギアの場面が一つの文学的トポスになっていった[25]。『あら皮』が嚆矢となった放埒的な酒宴の表象には、大革命後、とりわけ七月革命で明らかになった欺瞞的なブルジョワ社会に対する幻滅、社会の主要な位置から排除されたことに対する反抗、文学業界において急速に進行する商業化に巻き込まれていく疚しさなどから、自嘲や紋中紋手法などによって閉塞的状況を打開する新たな詩学を模索した作家たちの「脱中心化」の試みが

19　全般に『セザール・ビロトー』における登場人物の配役は執筆過程を通じてきわめて流動的に形成されている。当初の配役案ではポピノはセザールの敵役になる予定であった。またゴーディサールは配役リストに登場していない (*Pl*., t.V, p.1122)。

20　この名は当時の流行作家ダルランクール――『パリにおける田舎の偉人』で言及されることになる (*Pl*., t.V, p.300)――を思わせる。

21　霧生和夫氏作成のコンコルダンスによる。

22　ポンス酒は砂糖を加えた紅茶をレモンの外皮を入れたボールに注ぎ、温めたラム酒をそこに注ぎ、フランベして作られる。よって青い炎のイメージとともに描かれる (cf. ロベール・クルチーヌ『食卓のバルザック』石井晴一・渡辺隆司訳，柴田書店, 1979，p.322).

23　*La Peau de chagrin*, Gosselin et Canel, 1831, t.I, p.204.

24　Théophile Gautier, *Le Bol de punch,* in *Les Jeunes-France,* in *Œuvres*, Laffont « Bouquins », 1995, pp.153−173.

25　Cf. Marie-Ève Thérenty, «“Le docteur vaut peut-être mieux que le journaliste, mais il me plaît moins”. La représentation du journaliste chez Balzac » in Emmanuelle Cullmann, José-Luis Diaz et Boris Lyon-Caen (dir.), *Balzac et la crise des identités*, Pirot, 2005, pp.130−131.

反映されている[26]。

文士とポンス酒の隣接性がいまや確立した以上、上記の引用でダランクールがポンス酒の注がれたグラスを見てつい嬉しそうな顔をしてしまうごく些細な箇所にも、両者の親和性への（バルザックにとってみれば自己言及的な）参照を見て取るべきであろう。この後、校正の際に、ダランクールはジャーナリストのフィノに置き換えられることになるが、それよりも前に書かれた草稿の続きの第10章「大銀行」では既にダランクールがポピノの製品の宣伝広告のために新聞社に出入りしている様子が見られる。その振る舞いはすぐれて新聞業界人のそれである。

> ダランクールは目下、あらゆる新聞社を駆けずり回り、ライターたちに賄賂やディナーの饗応、おべっかを使ってしつこくせがんだり、また真夜中頃に雑報を書いて自分たちの裁量で取捨選択して欄を埋める職人たちには愛想よくして、記事を書いてもらっていた。ダランクールは、「ルニョー・クリーム」や「ブラジル混合液」などの、立ち回りが巧妙で、ジャーナリズムの影響力や繰り返される広告の推進効果をいち早く理解したあらゆる新製品に対しても、「セファリック油」を勝利させつつあった[27]。

このように最初の段階では「広告文」の書き手はいかにもそれに似つかわしいはずのジャーナリストではなくヴォードヴィル作家であったが、以後の箇所ではあたかもポンス酒の言及に招来されたかのように、ジャーナリストの人物像が姿を現しているのである。

ポピノ宅で広告文が披露された後、ゴーディサールは「よし、ダランクール、我らが若者を祝してポンスを一杯！」と気勢を上げる。とはいえ、後から様子を見にやってきたポピノの伯父の判事が食卓の上に目にするのは、「大目に見てやれる程度の慎ましい祝宴の食材」に過ぎない[28]。草稿で描かれているのは、このようにささやかな内輪の宴であった。それが著しい変貌を見せるのは次の初校の段階である。

2．校正段階

初校、すなわち、手書きの草稿から校正刷りという活字媒体への移行はテクストの可視性を大きく変えることから、バルザックが実践した果てしない書き直しのプロセスにおいても、小説のコンセプトを練り上げるための特権的な瞬間であった。ポピノ宅の場面はその特筆す

---

[26] Cf. Daniel Sangsue, *Le Récit excentrique*, José Corti, 1987, p.227. 実際、『あら皮』において、スターンの『トリストラム・シャンディー』から借用した曲線のデッサンの題辞、読者をはぐらかす「結論」、ラブレーに言及した韜晦な「モラリテ」（その後、『コント・ドロラティック』によってラブレーを擬した作品世界を独自に発展させていった時期である1833年の第三版で削除）などの断片を付した作者の挙措は脱中心的機制に属するところが少なくない。

[27] A92, f^{os} 116r°-117r°. 草稿の広告文の場面では「セザリーヌ油」となっており、矛盾するが、バルザックは執筆途上で商品名を変更することに決めたのかもしれない。

[28] A92, f^{os} 90r°–91r°.

べき一例である。広告文の提示に先立つ箇所の大半が抹消されており、これに代わって膨大な量のパッセージが加筆され、校正紙の裏面全体、さらに貼付紙片にまで及んでいる。新たに成立したヴァージョンでは、ゴーディサールの饒舌、豪華な料理の搬入の場面、フィノのポルトレ、広告文のプレゼン、宴の様子が描かれている。

これらを詳しく見ていこう。抹消と加筆の痕跡から、まずダランクールからフィノへと人物の置き換えを行った修正がなされ、これが場面全体の改訂を誘発したことが認められる。

> 入りたまえ、~~ダランクール~~＜フィノ＞。ポピノさんを紹介しよう。前に話した若者で、成功すれば感謝してもらえるぞ[29]。

こうして、『才女』（1837年７月、後の『役人』）で創造されたフィノが再登場人物として導入された。これが契機となって、場面の設定が大きく変更されていく（前述の引用箇所全体も抹消される）。

同時期のバルザックの創作におけるジャーナリストの人物造形は作品群の統括の上で特別に重要な意味合いを持っていた。『幻滅』第一部（1837年２月）の序文において、小説家は同作品の執筆中にパリのジャーナリズムの主題を着想したと述べ、続編ではそれを中心に据えることを告知している[30]。フィノなる人物の創出と『セザール・ビロトー』での再出はこうしたコンテクストの中で行われているのだ。以後もフィノは『ニュシンゲン銀行』と『しびれえい』（いずれも1838年11月）に再登場し、一方、『イヴの娘』（1838年12月～1839年１月新聞連載、1839年８月刊）ではナタンが登場する。これらの人物は『グランド・ブルテーシュ』（1837年２月）に由来するルストーらとともに、『幻滅』第二部『パリにおける田舎の偉人』（1839年６月）に召喚され、同作品の主要な人物となる[31]。よって、ここに人物再登場法の前望的活用を認めることができよう。バルザックは『幻滅』第一部の刊行以降、その続編に配置すべきジャーナリストを自作に次々に投入し、人物網の構築を進めていたのである。実際、本作でのフィノは、自らの才能に限界を感じて積極的に商業と結託し、有能な同業者を利用して成り上がろうとしている作家であり、執筆すべき『幻滅』第二部のテーマに照応している。

> 彼〔フィノ〕は自分に文学の才能のかけらもないことを認識し始めており、搾取側として文学の世界に踏みとどまって、才能ある人々を踏み台にし、実入りの悪い仕事などせずに、商売を行おうと考えていた[32]。

作者は一方、これほど打算的な人物がなぜポピノの広告文に本腰を入れて協力するのかにつ

---

[29] A94, f°44r°. ＜＞は加筆を示す。

[30] *Pl.*, t.V, pp.110–111.

[31] 『イヴの娘』は1838年冬に執筆が開始され、1839年２月初旬に完成しており、制作のクロノロジーにおいては、主に1838年12月～1839年５月にかけて執筆された『パリにおける田舎の偉人』に先立って成立している。

[32] A94, f°44v°.

いて、次のような動機付けを加えた。

> 彼〔フィノ〕には最初の活動資金が必要であって、ゴーディサールはポピノのオイルの中にそれが眠っていると指摘しておいたのだ。「ポピノの件で新聞と取引をしてくれ。でも彼を騙しちゃいけないぞ」[33]。

既に確認したように草稿の時点で文士ダランクールが新聞社に出入りするようになる流れができていた。バルザックは校正でこれを利して、売れない文士から転じて新聞業界で暗躍する人物フィノへと置き換え、一類型の誕生の局面を描き出すことに成功したのである。

作者はこうして再登場人物を集合させ、ゴーディサールとフィノという相補的なペアを構築した。両者ともに、『人間喜劇』でしばしば援用されるクラチリスム[34]――ジグザグの運命を歩む『Z・マルカス』の例がよく知られる――に基づき、名が体を表す人物である。ゴーディサールは « se gaudir de »（喜ぶ、からかう）を体現していることが『名うてのゴーディサール』で言及されている[35]。一方、フィノは « finaud »（狡猾）であることが『パリにおける田舎の偉人』でほのめかされる[36]。

フィノの登場に伴って、次のような書き換えが行われ、場面の飲食のあり方が大幅に変更された。

> ［…］~~三人の友は夜9時~~＜8時＞、薪束の燃え盛る暖炉の前に座り、~~ラ・ポトリ通りの市場の飲食店から買ってきたボーヌ・ワインのボトルをあけながら、ゴーディサールが温め直した簡素な夕食をとり終えようとしていた~~［...］[37]。＜二人の友は昼食の残りを食べようとしていたが、その時、ゴーディサールが立ち上がって言った。
>
> 「冷えた腿肉などまっぴらご免だ。新居祝いらしくもない。」
>
> 「でも」とポピノが広告文の代金として取っておいたポケットの中の20フランの音を鳴らして言った。「僕は…」
>
> 「僕は…」とゴーディサールは~~20フラン~~40フランを見せていった。
>
> 日曜らしく人気もなく、物音が響く中庭にノッカーの音が鳴り渡った。
>
> 「ラ・ポトリ通りのなじみの店のがやってきました。＜小生、＞名うてのゴーディサールは『僕は』じゃなく、『僕は持っている』でしてね。」
>
> 実際、ウェイターと後からコック見習いが二人ついてきて、選りすぐったワイン6本付きの籠三つぶんのディナーセットを運び入れた。
>
> 「一体、どうするんです？」と食の細いポピノが言った。

---

[33] A94, f°44v°.

[34] Claude Duchet, « De A à Z : Balzac, faiseur de noms », *Magazine littéraire*, n°373, 1999, pp.48−51.

[35] 「名前がこれほどまでに人の風采や物腰、容貌、声調、言葉づかいとぴったり一致したことはなかった」(*Etudes de mœurs au XIX^e^ siècle*, t.VI, pp.312-313 ; *Pl*., t.IV, p.565).

[36] *Un grand homme de province à Paris*, Souverain, 1839, t.II, p.261 ; *Pl*., tV, p.381.

[37] 以下、ゴーディサールが広告文を手にする直前までの箇所が抹消されている。

「物書きというのは~~酒飲みで~~、仰々しく派手なものに馴染んでいるものでね。奴さんがいまやってきますよ。ガーンと打ちのめされるような――気の利いた言い方でしょう？――広告文を持ってやってきます。広告はいつでも喉を乾かせている。花が欲しければ、~~芽に~~種に水を撒かなきゃ。」彼はコック見習いたちに「奴隷たちよ、ほら黄金だ」ともったいぶった言い方をし、10スーを渡した。「これはどうも、ゴーディサールさん」と金よりもこの冗談に喜んだコック見習いたちが答えた。
［…］頭の先から足の先までいかにも帽子屋の息子といったずんぐりとした体型で、鈍重ながらも月並みな様子の下にずる賢さを隠し持つ下膨れで小太りの中背の若者が唐突に姿を現し、金欠でまいっている顔つきだったが、食事の支度の整ったテーブルとワインのボトルを目にすると大層ご満悦といった表情を見せた［…］＞[38]。

草稿ではオードブル程度の軽食が運ばれていたのに対し、ここではゴーディサールによってたっぷりとした食事と上質のワインが準備され、フィノをねぎらうだけでなく、ポピノの事業の門出を祝う盛大な新居祝いが演出されている[39]。ゴーディサールの景気づけの台詞も変容する。

よし、~~ダランクール~~＜フィノ、食卓につこう。惣菜を食べよう。＞、我らが若者を祝して~~ポンスを一杯~~＜シャンパンをたっぷりと飲もう＞！[40]

実際、下記の加筆によって、登場人物一同が広告文を検討した後で御馳走を存分に堪能したことが示されている。

三人の若者はライオンのように食べ、スイス人のように鯨飲し、「セファリック油」の成功を期して酔いつぶれた。「このオイルは脳天に効くなあ」とフィノがにやけ顔で言った。ゴーディサールはオイル、頭髪、頭、等々についてあれやこれやと駄洒落の限りを尽くした[41]。

ここで、豪勢な料理やアルコールの揃った食卓は、異業種の人々の結束の場となっており、製造業者・販売人・ジャーナリストが意気揚々と新製品販売の出陣を祝った様子がうかがえる。実際、その体形から健啖家であることを思わせるフィノ（若くして「白髪まじり」の憔悴したイメージのダランクールとはこの点でも異なる）はもとより、飲食にあまり関心がなかったはずの内気なポピノまでが大いに打ち解けて食の快楽を味わっているのである[42]。

---

38 A94, f°44r°.

39 食品のテイクアウトや料理のケータリングは当時既に盛んであった。最初に触れたように、本作中でもビロトーが自宅での饗宴のためにシュヴェに高級料理の仕出しを頼んでいる。バルザック自身も時にこうした店から料理を取り寄せて客を迎えていた (cf. Suzanne Jean Bérard, *op.cit.*, p.10).

40 A94, f°46r°.

41 A94, f°46r°.

42 これに伴い、ポピノ判事が目にする食卓についても、慎ましやかな食事風景の痕跡が抹消され、「大目に見てやれる程度の~~慎ましい~~祝宴の~~食材~~＜残り物＞」となっている（A94, f°46r°）。

さて、これら一連のパッセージでバルザックがゴーディサールに口の快楽である美食を大盤振舞いさせると同時に、言葉の劇を振舞わせていることが注目に値する。この出張販売人はそもそも饒舌な人物という設定ではあるものの、その特徴がここで誇張され、「冷えた腿肉などまっぴらご免だ」など演劇的で大袈裟な見栄の切り方に加え、換喩（「広告は（＝広告文作者は）いつでも喉を乾かせている」）、隠喩（「花が欲しければ、種に水を撒かなきゃ」）と修辞的な言い回しを連発させている。また、彼がとめどなく地口を言ったこともほのめかされている。食卓のカーニバル化は言葉のカーニバル化を伴っているのだ。これはさらに再校の際にテクスト前方に逆働的に影響し、ゴーディサールとポピノの最初のコンタクトの場面で、ゴーディサールの歌（「ほらほら、フランス兵だ」）や『ル・シッド』の台詞をもじった一節（「姿を見せたまえ、香水商よ」）が加筆されている[43]。このように、作中で異彩を放つ陽気で饒舌な気取り屋ゴーディサールのキャラクターの形成は、生成過程上、食卓の場面の豪奢化と連動していることが明らかになるのである。

ところで、一連の書き換えによってポンス酒の言及は抹消されてしまったかに見えるが、新居祝いの場面から消えはしたものの、同じ章のこれに先立つ箇所の再校に登場してくる。作者は当該場面の修正を反映し、販売協力を依頼されたゴーディサールがポピノに広告文の調達を告げ、その担当者フィノの人となりについて語る一節を加筆している。

> では広告は私が引き受けましょう。幼馴染でアンドッシュ・フィノというのがいて、コック通りの帽子屋の息子ですが、文学をやっていて、『クリエ・デ・スペクタクル』で劇評など書いているなかなかの才人です［…］。フィノはマルス嬢のために一幕の素晴らしい喜劇を書いたけど、上演してもらうためにゲテ座に持ちこまなければならなかったんです。でも広告には通じていましてね。広告というものがわかっているし、商売人目線で考えてくれる。横柄なところもないし、友情から広告文を書いてくれることでしょう。ポンスのボールだとかお菓子を振舞ってやることにしますよ[44]。

興味深いのは、この内容には、初校で既に書かれたゴーディサールとフィノのやり取りと齟齬があることだ。出張販売人は実際には、計算高いフィノに具体的な利益をちらつかせて仕事をさせ、饗応にもぬかりがない。だが、ナイーブな部外者であるポピノに対しては、仲間の文人にはポンス酒でも出しておけば十分だとうそぶいているわけだ。自らの名の原義にふさわしく、恩返しにさえもミスティフィカシオンの味付けを忘れないゴーディサールのキャラクターが形成されているのである。

ポピノ宅の挿話をめぐる構成は以上の改変で概ね確定する。以後、第６章の修正は主として広告の文面や印刷効果の調整に費やされ、その前後のやりとりに加えられた変更は小規模

---

[43] A96, f°296r°.

[44] A96, f°296v°-f°297r°. ポピノ宅の場面で「サプライズ」の文言が消滅しているが、フィノの協力についてポピノに予告するこのパッセージの付加と連動しているのであろう。

にとどまる。目立った修正箇所としては、第七校における、ゴーディサールのフィノへの台詞の加筆（増幅）である。

> この人〔ポピノ判事〕をかついだりしちゃいけないぞ。俺の命を救ってくれたんだから。俺は窮地に立っていたんだ。〈断頭台の寸前で、「スパッ」と髪の毛ともおさらばになるところだった。シャンパンが通っていくこの管が残っているのもこの高潔な司法官のおかげだ。泥酔してもそれは覚えているんだ。〉[45]

出張販売人が命の恩人の甥に尽力する動機付けが強調される一節だが、既出の「髪の毛をめぐる地口」に合致する軽妙な台詞が加筆されている。

以上のように、主に初校段階で作中の表象は大きく変貌し、意味作用が深化された。まず、再登場人物の役割によって、バルザックの他の作品との連関が強化されている。野心家のフィノは新聞業界に食い込み、頭角を現し始めている。『ニュシンゲン銀行』、『しびれえい』を経て、『パリにおける田舎の偉人』でそのしたたかな搾取者としての相貌が描かれることになる。一方、この場面でワインの目利きぶりを発揮したゴーディサールは、物語のクロノロジー上では後日談にあたる『名うてのゴーディサール』（1833）において、出張先のヴーヴレーでほかならぬワインをめぐって一杯食わされる。さらに今度は同作品のフュルヌ版（1843）での改訂へと波及し、ここで出張販売人は愛人のジェニーにかつての仲間の出世を語っている。作品間にフィードバック効果が波及しているのである。

> 俺も友人のフィノのように新聞の株主になろう。帽子屋の息子だが、いまや三万リーヴルの年金があって、貴族院議員に任命されそうな奴だ。小ポピノのほうは…、そうだ、言い忘れていたが、ポピノさんが昨日、商業大臣に任命されたんだった。俺だって野心を持ちたいじゃないか[46]。

そして、『セザール・ビロトー』の作中においては、自ら販売広告を手がけた第一世代のビロトーとは異なり、製造・宣伝・販売の分業による事業拡大策を実施する次世代の商人ポピノの姿が現われてくる。ビロトーが没落へと進みつつある間、産業とメディアの急速な展開が進む時代に先駆けた商業キャンペーンに打って出る若き商人の冒険を描くことで、一産業の社会的発展が喚起され、作品に歴史性が書き込まれるのである。

ここで取り上げたのは一作品中のそれも限られたいくつかのパッセージに見られる食の問題にとどまる。しかし、分量にすればわずかな記述が、他の作品における食の言及と共鳴しながら再登場人物の導入を招来し、そこから派生した大幅な書き換えによってテクストが新たな変貌を遂げる重層的な生成運動にわれわれは立ち会うことができた。バルザックの作品創作の場において、草稿から校正を経て再読が重ねられていく中で、言葉が言葉を呼び起こす触媒として作用する食の一側面が確認できるのである。

（2014年10月31日受理、12月３日掲載承認）

---

[45] A97, f°219r°.

[46] *Pl.*, t.IV, pp.570-571.